

『赤いろうそくと人魚②』

おがわみめい
小川未明

娘は大きくなりましたが、姿が変わっているので、恥ずかしくて顔を外へ出しませんでした。けれど、一目その娘を見た人がびっくりするような美しい器量でありましたから、中にはどうにかしてその娘を見たいと思って、ろうそくを買いに来た人もいました。

おじいさんとおばあさんは「うちの娘は内気で恥ずかしがりやだから、人様の前には出ないのです。」と言っていました。

奥の間でおじいさんは、せつせつとろうそくを造っていました。娘は、自分の思いつきで、きれいな絵を描いたら、みんなが喜んで、ろうそくを買っただろうと思いましたが、そのことをおじいさんに話しますと、そんならおまえの好きな絵を、ために描いてみるがいいと答えました。

娘は赤い絵の具で白いろうそくに、魚や貝やまたは海藻のようなものを誰に習ったわけでもなく上手に描きました。おじいさんは、それを見るとびっくりしました。その絵を見ると、誰でもろうそくが欲しくなるような不思議な力と、美しさが込められていたのです。

「上手いはずだ。人魚が描いたのも。」とおじいさんは感嘆して、おばあさんと話しました。

「絵を描いたらろうそくをおくれ。」と行って、朝から晩まで子どもや大人が店まで買いに来きました。

1回目

| |
|---|
| 分 |
| 秒 |

2回目

| |
|---|
| 分 |
| 秒 |

3回目

| |
|---|
| 分 |
| 秒 |